

共古日録

参始

赤  
表  
古  
書  
印

Handwritten calligraphy in cursive style, including the characters "文" and "格" at the top, and "寄" and "家" in the middle. There are also several circular postmarks and a red rectangular stamp with Japanese text.

特別  
15  
1413  
32



門 15  
 號 1413  
 卷 32

共古日録三十

元禄八年  
 回向院



一舟の懐ありて元禄八年  
 舟の懐ありて元禄八年  
 舟の懐ありて元禄八年

始二向半  
 北七向四尺  
 西七向二尺  
 北七向二尺  
 屋鋪八向始三歩  
 北七向四尺  
 西七向二尺  
 北七向二尺

向岸 十二向半  
 七向半  
 北七向四尺  
 西七向二尺  
 北七向二尺

右が回向院の地所なりし見ゆ元禄八年以河岸迄寺の部

早稲田大学図書  
 昭和25.10.24  
 購 入 券













可少王祠の跡右標云々あり前標形七あり延正の始  
此祠ありしものなり所地右尊一面青月々々して取  
り所只しりしりして正正をに世長堂あり墓心あり母如  
碑教後教所多くあり年流をねるもの

弥種 康永二年 妙慶寺 聖御弥陀仏 康永二年 康永二年 妙慶寺 康永二年 妙慶寺 康永二年

延慶二年 延慶二年 延慶二年 延慶二年 延慶二年 延慶二年 延慶二年 延慶二年

妙慶寺 妙慶寺 妙慶寺 妙慶寺 妙慶寺 妙慶寺 妙慶寺 妙慶寺

妙慶寺 妙慶寺 妙慶寺 妙慶寺 妙慶寺 妙慶寺 妙慶寺 妙慶寺

妙慶寺 妙慶寺 妙慶寺 妙慶寺 妙慶寺 妙慶寺 妙慶寺 妙慶寺

弥種 康永二年 弥種 康永二年 弥種 康永二年 弥種 康永二年 弥種 康永二年 弥種 康永二年



三種



三種 延文五年六月

三種 元治三年四月廿九日 (徳字法に作りしあり)  
 此の年既して荒年なりしにありて其時一乃道一原由  
 苦しいに如くもなるも其にありて三村其村にありて其  
 樹木の枯れたるも其にありて其にありて其にありて其  
 事場も其にありて其にありて其にありて其にありて其  
 河大寺も其にありて其にありて其にありて其にありて其  
 と堂殿も其にありて其にありて其にありて其にありて其  
 本堂も其にありて其にありて其にありて其にありて其  
 新築も其にありて其にありて其にありて其にありて其

鎌倉浄妙寺に  
古印ありし乃

十三年の遺書  
現存の寺

山安の板碑  
下練馬の古石  
佛

相川の鎌倉浄妙寺には瑞雲の古堂印ありと記す者あり一説に  
 許すに又二階堂と記す者あり一説に  
 ころに民共なりと記す者あり一説に  
 木柱そのまゝと柱の木何れも数本を同じ木なりすと記す者あり  
 成の寺大なる見らるゝと記す者あり  
 題歴教の書若し方庵静然の遺經遺書中今都立  
 清浄寺西照寺に職ありて現良方に記す者ありと記す者あり  
 横の墓並りて縁ありて寺に記す者ありと記す者あり  
 寺中初喜の長安寺に山安二年の板碑あり  
 下練馬の寺今神に田畑院と記す者ありと記す者あり  
 神元天永三年の火日の右邊ありと記す者ありと記す者あり







古くは時長、歌時の子孫と云ふ盛高の母、平賀の姫  
なりと云ふが時年代も河俣の頃に云ふ事、  
の浦の浦、高野川東の也、  
浦と云ふ川、西の也に、東にあり、  
寶二年駿河國庵原郡多胡浦濱獲黄金散之とある、  
の浦原、西火、小金と云ふ地、  
有ること明かり、山部高野、  
は奥向に不盡の高嶺に曾は降りけり、  
の海上、北東に不盡の高嶺と望見し、  
こゝに見ゆれば古く、  
あうまししなり

子古の呼坂の世

子古の呼坂

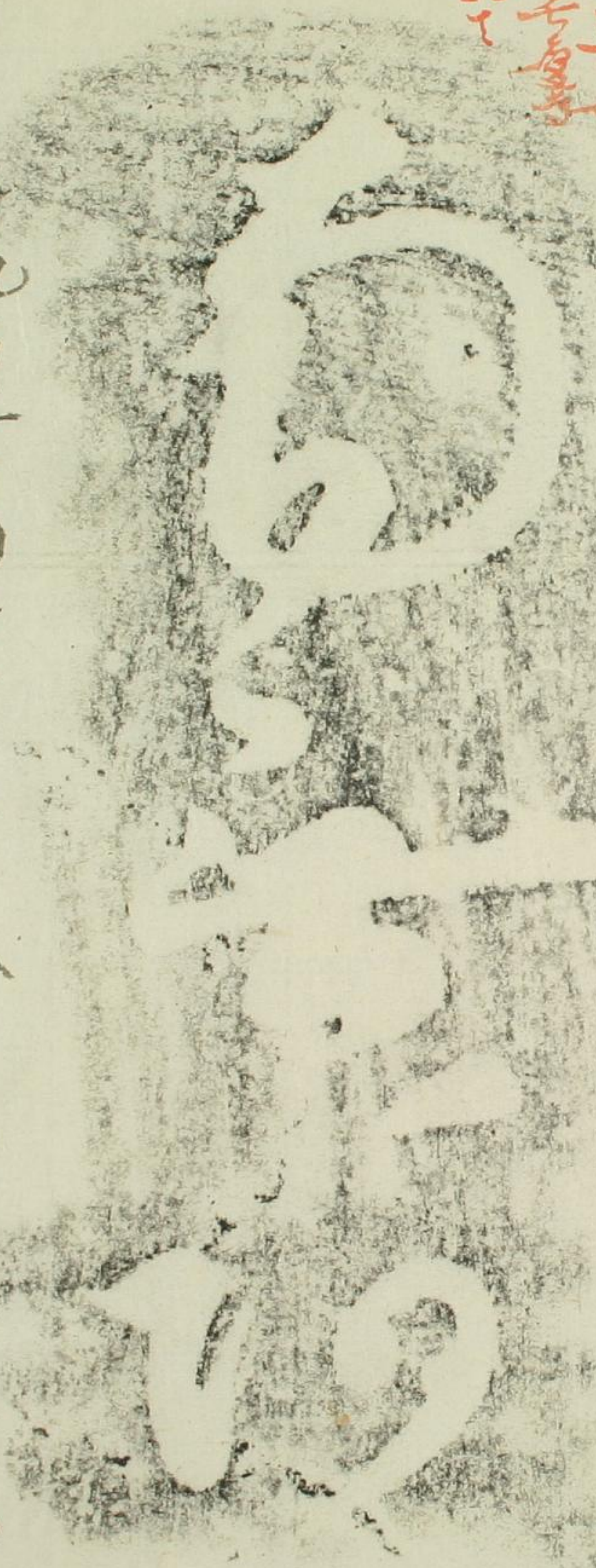
子古の呼坂と云ふ、  
坂を呼坂と云ふ、又同郡今泉村と原田村の向、  
呼坂と云ふ、又、  
り云々、呼坂、  
ある、  
まゝかの國の凡、  
まゝかよふ神あり、  
来り、  
かゝる、  
岩木の山の、



此處に讀老菴といはれは始すに從來此處に國田五郎  
 の姓あり、爰見東に久人長孫の外にも久人と其墓  
 所の分明なきを云ふに云ふに由り  
 此正行の如く三村氏の考後、通當なりと思はる。老樗軒書ありて、賦なり。若珠と、晩年梅毒のため死せしとの説あり。て所家の死せし、其の名字なきを尋て知らざるにあり。あらず。没年月日、戒名なきの外、今日、所て、州へ歸りて、道なきを信ず。先年也の瑞雲賢寺墓石あり。其父は法會堂にありしを、あつて、あつたが墓石あり。其人の死し、前の石に、買ひし縁石塔の中、老樗のありしと、録あり。然るに、彼と、其故、七年八月十日、没し、四十三歳と、其墓石中、墓所一見、為人に、知らざる、通稱、伊勢、平次、命と、いふ也。

平次東此  
 追善會  
 乃古善寺  
 記

平次東此の墓石の  
 追善會の墓石



此處に、考の、瑞雲寺、一、戒名、七、刻し、あり、其、墓石、の、銘、に、と、れ、東、此、の、為、に、婚、込、建、墓、せ、り、も、の、見、ゆ、東、此、の、亦、其、墓、に、考、の、納、し、と、平、次、東、此、の、墓、所、の、如、く、と、名、か、

五好嘉号又ハ右弟トシテ五好東家名ハ懐之号ハ

五好東家

子五好東家ハ其の號又東魁又嘉號ト號セリ寛政元年三月  
八日右新嘉号ト號テ年六十五美書多クあり

其五年三月ハ三河村三村及子等追善會ト號シ  
善慶寺ニ歸リ田志次女一名美書志也書ハ辰寛

五好東家

六字名號の  
本に横行  
に別しあり

五好東家





平賀仙傳  
廿一用  
孫人

前合  
後

名譽者世に  
か所て  
考考の  
東此の  
出る



唐覺世籍羅冊廿七人のるん巻との何れはあゝの巻

常言法友の好海あり

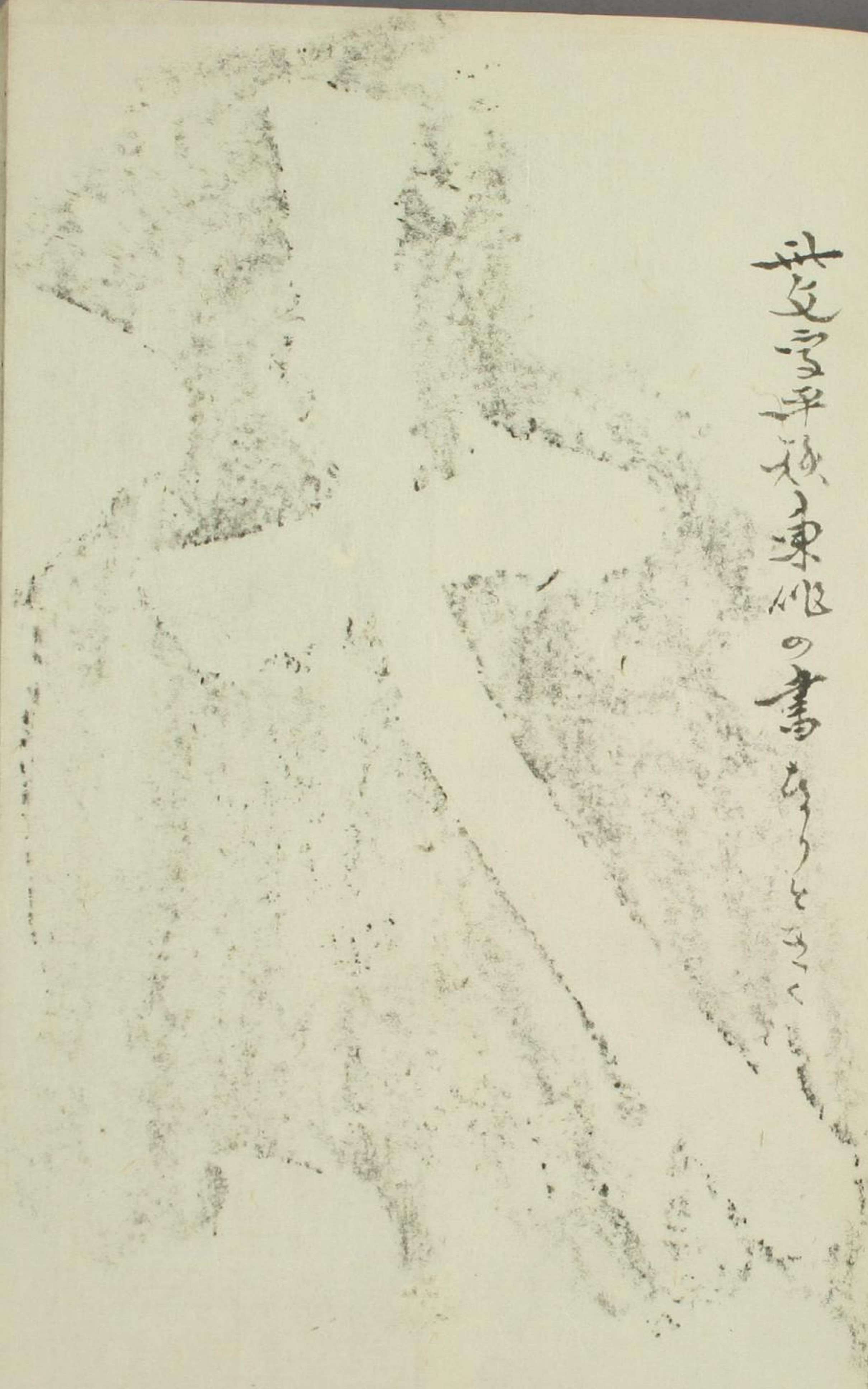
あつしし人のどうやう同身味仏となつた入つて東地 三冊に

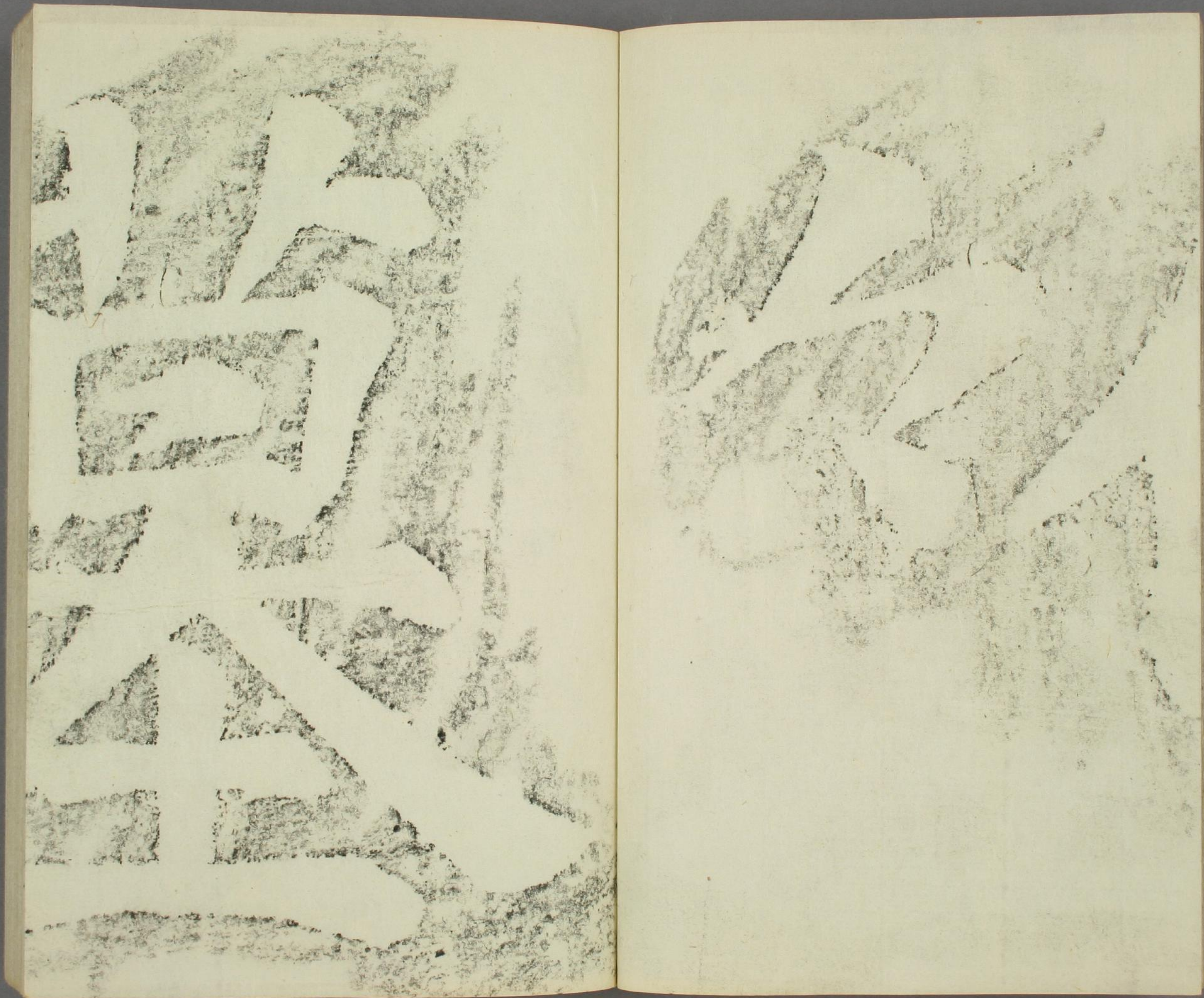
をを音の天切づらたたれしきう今日書のもの入つて東地 本冊に

あはるんれおちちせけんをけしきうある年あま入つて東地 本冊に

百年籍へつての男は奉り細くは受と線香の燈 共古

斗文平秋東地の手書







富田某あり福為社ヨ名水盤をあつし持て草書りて  
富田と書てせりに石を置て二五と讀て刻したる寺に納りて



吾度寺墓心ヨ内山橋軒の師なる故静山の墓あり  
これ又縁と云々香花の供す者ありし

下の如く墓者例

本國總乃千葉平常重末孫也香尾州  
愛知郡生寛文五年己正月十日迄享  
四年丁卯九月廿二日於京都西北大福寺  
以天年終行年八十有三歳



紋あり不明  
鐘樓あり  
あり二層の墓あり  
辞世の詩あり

不惑年前唯眼膏  
已鑿知命用心中  
八旬餘筆不非勉  
起卧周施將氣然







けら糖の現つは 三味や太鼓のつづむの大きさが ころや  
うたいし 鈴の連なり 聲ふる供を呼ぶる 續て来た  
さかしのとちいぶは直に手びしものわが 刺鉾の香慶子  
疾く疾くのまをよき妙下 呼あくる向者 大和茶の腰  
我知言のあゆり 能念伴 あまの留 こわらつかい けり  
の浮判 吉原が電けんに 充満して 不自由なる 成り  
の代の時つ 風狩来 総一ぬんの中に 菅笠の目ま 立つ 編笠は時  
にあはげ 逆さ 編笠もも 笠もも 笠もも 笠もも 笠もも 笠もも  
人見せすか 笠もも 笠もも 笠もも 笠もも 笠もも 笠もも  
のぢりま 笠もも 笠もも 笠もも 笠もも 笠もも 笠もも  
かつや 菅笠もも 笠もも 笠もも 笠もも 笠もも 笠もも  
天宮の日覆ひなんも 今更 顔も かげむかす 笠の 青張赤

張の日傘 女子は髪をいし 子供は日傘をいし 女は素直は素直も思  
髪の日傘の髪をいし 髪をいし 髪をいし 髪をいし 髪をいし 髪をいし  
の日傘をいし 髪をいし 髪をいし 髪をいし 髪をいし 髪をいし  
大さき書きたる 髪をいし 髪をいし 髪をいし 髪をいし 髪をいし  
の傘は友古張の 髪をいし 髪をいし 髪をいし 髪をいし 髪をいし  
着物と對り 玉子うら 草履は雪駄に似て 鳴音なるを  
以て 髪をいし 髪をいし 髪をいし 髪をいし 髪をいし 髪をいし  
頭巾足袋の 髪をいし 髪をいし 髪をいし 髪をいし 髪をいし 髪をいし  
あつた 髪をいし 髪をいし 髪をいし 髪をいし 髪をいし 髪をいし  
りもの 髪をいし 髪をいし 髪をいし 髪をいし 髪をいし 髪をいし  
夏の末秋の 髪をいし 髪をいし 髪をいし 髪をいし 髪をいし 髪をいし  
峰崎橋は 髪をいし 髪をいし 髪をいし 髪をいし 髪をいし 髪をいし

この心は花火を火其終りか煙管見物なりと云ふは久しもの  
にせよのみ此はしるべ古より川に火をたき野を比を高懸なりと  
つは梅船に梅の花を世のなういらは辰すけのしるべ  
昔年の光を伸張せし大和当道の長きくしるべ  
に座をかき其外壯年の男女が勢車座を居なうい大和七五  
三の如きよくおなり也 世に三の勢車の勢の勢 大和伸又は勢車と大和  
勢に場を流したかい梅きし行を名けて水地銀鬼とす  
陸地銀鬼は定めてこみつらるる船中の入々せしめ船歌は  
素も水もよか程と赤鯉と鯉もいなるもすむ網の目を  
これ釣長細の針とよめ鯉の眼をまめめ鯉の口をのめれ  
伸もいなりそなるものなるに世のなうい梅張氣はなるも梅  
なり思ふは法の道も持にあり涼みかたりなるも天竺の遠い

うーえとらく 著 藤 世 の 後 の 世 を み ぬ は 眼 力 三 と か へ ぬ 三 と ぬ  
みえとら

帯の幅寸まの博多の赤鯉はくし袖なり大きく四角に  
て身はせきく袖下を縮まらず袖口を細く伸の  
長形は 髪をすくはし本田と云ふにのい是れ名けて度  
痛本田と云ふゆり熱病をわづらひ髪をすくはし  
あつものなるが帯をこもるおびと袖口を首迄袖口を袖を  
人形袖とす 首をくし帯をくし袖をくし 脇差を楊枝形多  
に誰名付ともなく 勢名の次方斯の如し衣敷の如き身のと  
り 愛のよはして銀さすの先は花より 南原さらさの烟草  
の袂よりが 國方の煙草は火のよさを見せの菊の白敷  
は花よとんで見し 三足わりの裏の裏は草履はせいのひくさる





此の母の所載  
サシタマリヤ

向ふと通しちうと火御宿の道徳運流のありと

元祿十年の枝本此の葉

あかの志と成るさんたまりや  
あかの志と成るさんたまりや  
あかの志と成るさんたまりや

此頃のサシタマリヤは聖母マリヤのをもとに  
なれど黒船も縁が

然りと嫁しられ獲の船と成る切利支丹と同じと男女の縁

を以て煙窓と見られ外身は切利支丹の者古きものか

是れも前記の如く切利支丹の語り也  
これら前記の如く切利支丹の語り也

また此後天幕の楽園よりを転いし新橋の店に語り也

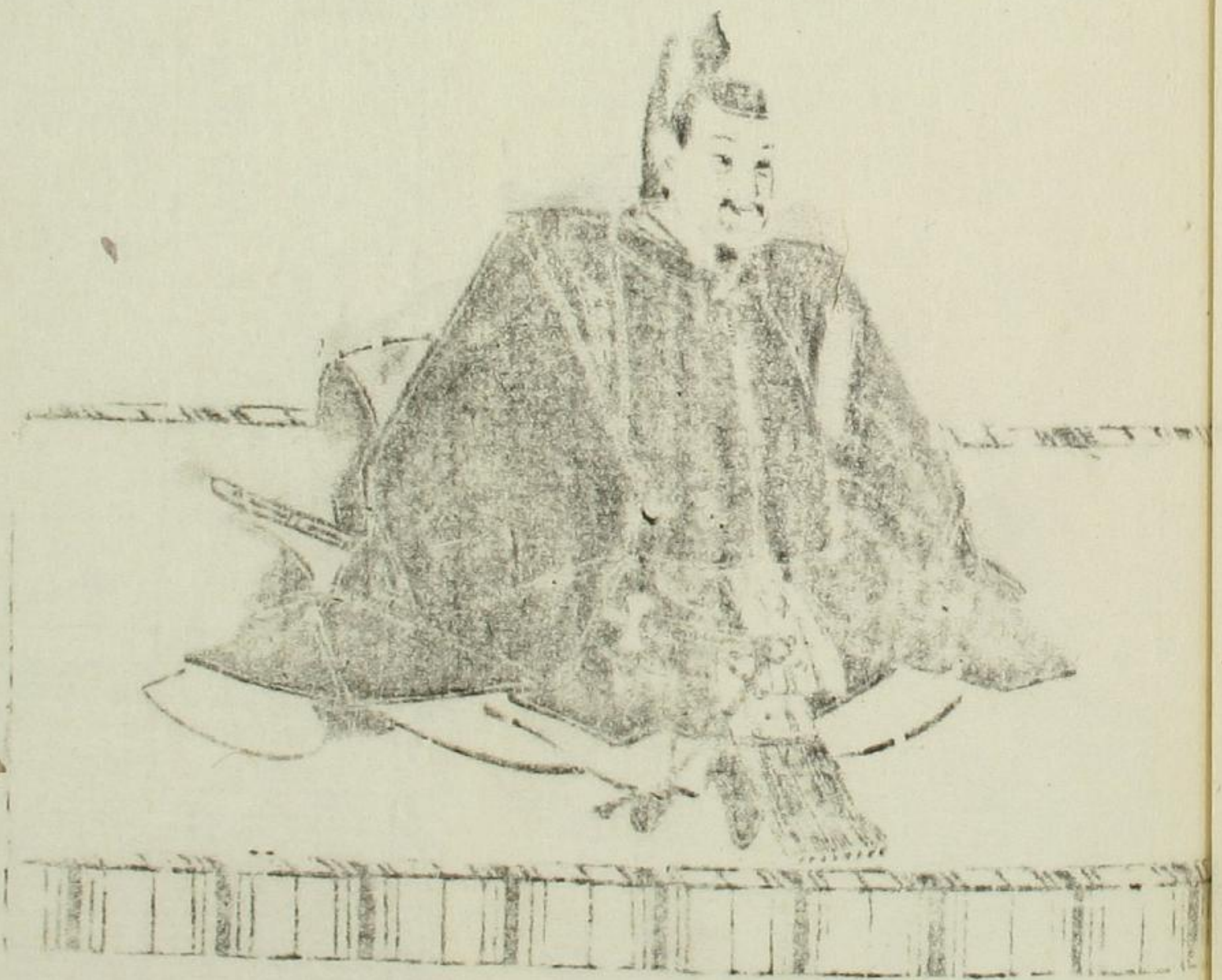
また此後天幕の楽園よりを転いし新橋の店に語り也

また此後天幕の楽園よりを転いし新橋の店に語り也

魔術を行ふ者  
の呪文ハライリ  
ハライリ

向ふと成るさんたまり

此の母の所載  
サシタマリヤ





この書ありては時

大に中興せしつとてふを  
成田は方々を敬服の存をせは掛り  
武行りあり

西宮の各物能王のあまこさつにつかちさつた時  
とる昔の海をさし通りし明暦元年申辰と通じ  
とあり氣王御堂の申の各名をさし  
あさつた由平御堂とあり大也震の後と云  
せしをさし申道と云ふ道ありしか  
やも永村是より貝合れり  
貝合に種ふ大拾遺村より  
京大坂大和の業ふ見ぬ雷也雷場  
新しきあり

大原村右の  
脚半

大原村右の脚半の  
とは友對にして向  
の方にしてす前右  
つん大原のふ  
て北ふ法部は勿論  
さし入新い行は  
この



かまの巻の墓  
その

かまの巻の墓は南平住三六日  
あり明治二年十一月十日  
現今その親父は千原南組十九  
代前の代田中強四郎といひ  
かまの巻の墓は







六 榮壽堂藏象圖譜

一 寬永銀

四 寬永銀

舊庄内古銀藏象圖譜

庄内藏象大藏歷志

目錄

一 尾形清七

四 高田小七

七 日向切出

十 杉本屋利

目錄二

一 杉本屋利

二 文久銀

五 明治銅貨

五 山録

歷志

二 星谷部

五 坂下

八 竹村

十 戶田

十 藤吉

二 右黒半

三 天保銀

西洋銅貨

三 池田

六 中村

九 堀越

望土名先輩

三 久米益庵

八七

四 安部吉兵衛

七 真嶋傳右衛門

十 高田雷右衛門

十三 榎本元吉

十六 中里権兵衛

十九 河部以右衛門

廿二 中村三郎右衛門

廿五 菅原左衛門

廿八 榎井三郎

卅一 庄司三郎

卅四 栗田喜久治

卅七 小田克己

五 坂垣貞孫

八 堀越俊平

十一 三石山右衛門

十四 本向光弥

十七 中村伊兵衛

廿 右川平兵衛

廿三 岡田匠次

廿六 板山善助

廿九 西村清成

卅二 赤坂源兵衛

卅五 越嶋三郎治

以上三十七名

六 鈴木佐次郎

九 杉本林平

十二 島本吉藏

十五 大塚三郎治

十八 鈴木廣弥

廿一 山岸貞栄

廿四 島本元經

廿七 中村守内

卅 右川源太郎

卅三 加藤伊三郎

卅六 白崎銀三郎









中事と申す  
のり

きりしと云々の意の及ぶ可成り角力の鬼面山の故  
而を記ししもの鬼面の山に於て居たれと云ふ事も其の  
故に成るの今の人々の父大に因りてありしと云ふ人の  
おのれ身中事等よりしと云ふ此の山に於てありし  
鬼面の山の大黒山と云ふ鐘店も世にてもありて居り  
此の山に於てありし中事と云ふ鐘店も世にてもあり  
たれと云ふ事等よりしと云ふ此の山に於てありし  
に居たれと云ふ事等よりしと云ふ此の山に於てありし  
そのまゝと云ふ事等よりしと云ふ此の山に於てありし  
形に事と云ふ事等よりしと云ふ此の山に於てありし  
中事と云ふ事等よりしと云ふ此の山に於てありし  
中事と云ふ事等よりしと云ふ此の山に於てありし

ト云ひの意は  
古くよりあり

鐘浦地

寶永八年の印本日本新承代蔵に定座三ありと云ひの  
時の鐘を講じしと云ふ三代以前買年と云ふ一丸百三十三  
丸しと一丸百三十三丸と云ふ相場をいふ事十九巻大判を  
強しと云ふ事ありと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
名前古くよりありしと云ふ事

江戸をゆくれば江戸前の浦地を念せんと思ふに其理なき  
なる事四巻九の浦地あれど江戸の如きは長崎  
に和泉屋といふ江戸の通るなりと云ふ事と云ふ事  
此の二三年の江戸新町に其の二条の城外に其  
といふ鐘店ありしと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
行しと云ふ事  
栗塚の堤河鐘店あり鯉こくと浦地のみの料理店あり





特別の注意

予も古き書に見るにあり今又あるの信見定なり并  
仰る海と申す申す山形が赤海と申すありあ  
りれと申す用ひし由又歩行道の或るを腰當り不用  
るの事申す不用知に不用なり又の古事の時と申す  
の例に近く奉供せしもの衆の御と申すの御と申す  
ありしもの御と申すの御と申すの御と申すの御と申す  
中と申すありしもの御と申すの御と申すの御と申す  
にありしもの御と申すの御と申すの御と申すの御と申す  
夜に時と申すの御と申すの御と申すの御と申すの御と申す  
時と申すの御と申すの御と申すの御と申すの御と申す  
と申すの御と申すの御と申すの御と申すの御と申す

つらつらと銭  
ガニガリヤ銭

つらつらと銭と申すの御と申すの御と申すの御と申す  
ガニガリヤ銭と申すの御と申すの御と申すの御と申す  
と申すの御と申すの御と申すの御と申すの御と申す  
と申すの御と申すの御と申すの御と申すの御と申す  
と申すの御と申すの御と申すの御と申すの御と申す  
と申すの御と申すの御と申すの御と申すの御と申す  
と申すの御と申すの御と申すの御と申すの御と申す  
と申すの御と申すの御と申すの御と申すの御と申す  
と申すの御と申すの御と申すの御と申すの御と申す  
と申すの御と申すの御と申すの御と申すの御と申す

徳應三年の事

徳應三年の事と申すの御と申すの御と申すの御と申す  
と申すの御と申すの御と申すの御と申すの御と申す  
と申すの御と申すの御と申すの御と申すの御と申す  
と申すの御と申すの御と申すの御と申すの御と申す  
と申すの御と申すの御と申すの御と申すの御と申す  
と申すの御と申すの御と申すの御と申すの御と申す  
と申すの御と申すの御と申すの御と申すの御と申す  
と申すの御と申すの御と申すの御と申すの御と申す  
と申すの御と申すの御と申すの御と申すの御と申す  
と申すの御と申すの御と申すの御と申すの御と申す

書



葛西志所  
載年ヲ成

婦いそ急命の強きと其世の移り地有り此の木を  
の徳をその南端印りて四明うたふて所なりと  
世の此の木枯れしをきよとて其日の金と  
其公のそれと急命のつらきと此報せしき  
の徳をその思ひを心よりて形大をなす見す大  
形を造り枕柱を造りて心よりて外もす  
能はざりしと此形を其公の記とて此の人とあり  
所なりしと此形を其公の記とて此の人とあり  
の心より急命を造りて心よりて外もす  
しありと此等の話したる事ありて此の  
所なりしと此形を其公の記とて此の人とあり

葛西志卷十三：亀戸村錢座跡の記奉あり三河村  
之形に錢座跡の跡の形を写し置るべしと信長守を

亀戸村  
錢座跡

天神社より南の方に有 船別四町あり三河の  
也と云 此錢座の昔は綱繩子にありしと後年こ  
の跡をいしなりきと其地は東洋にせす  
按に寛文十一年將行の江戸繪圖に既に此錢座あり  
然れが此錢座は火燒方治年中本所の地割ありし  
以よりの事なりと彼が先達の是れ將軍の代錢奉行  
の由平儀とて彼が先達の是れ將軍の代錢奉行  
となりて同本に始り鑄錢する也とのなりしが

元初嘉慶慶の後 子孫徳士となりて 諸國に客居  
せしを 寶永年中 銅貨ありて 舟の鑄銭の長き  
しと平藏の事ハ 別に思ふべし 下にさしせり 倭  
芝網繩子に於て 鑄銭セ始しと云ハ 寶永十三年  
の事なり 是今世に行る 銅の寶永通寶なり  
元より後 元禄年中 同じ寶永通寶の形なき  
鑄造す 是今世に流布の 銭なり 或書  
云 依大農秋原直秀之策 鑄銅錢 銅以銀  
錫及鳩取陶器為末以煉之 文依 藏王寶永中  
所鑄錢曰寶永通寶 而形小焉 重六分強 與寶永  
錢並行 列相或言 錢薄小且惡 直秀曰 幣者 國家  
所造 雖以瓦礫代之 而且可行 今所鑄銅錢 雖茲

東尚勝於 鈔河遂行 之在 刺莫敢難 之は 是なり  
古今 泉貨 鈔を 通井戸村 元徳 銭者 元禄 十年より 寶永 元年迄 宝  
永 五年より 正徳 二年迄 正徳 四年より 享保 三年迄 元文 二年 明和 二年  
同 五年迄 載たれば 連年 少續きて 鑄せり といふ あり されど  
其事 其の 集録 により 誤り 多き 寶永 以來 當の 鑄銭 ありし  
或る ことに 知れ たらば 果して ころこし せらる こと あり しかば  
寶永 五年 秋 二 寶永 通寶 といふ 一 銭 とい 寶永 銭 十 銭 二  
等 大 銭 二 鑄 造 せり といふ 是 僅に 數年 ならず して  
通用 せ 禁 せられ たり 又 明和 五年 川井 次郎 兵衛 之 故  
が 策 に 依り 新に 直 銅 銭 七 鑄 せり 是 今 日 之  
銭 あり 或 書 云 自 藏 王 之 時 鑄 寶 永 通 寶 銭  
治 鑄 相 繼 然 比 給 所 請 較 少 至 今 亦 三 未 鑄 故  
錢 制 作 粗 忽 文字 皆 味 以後 不 復 鑄 銅 銭 而 鉄





近年木校那の  
名

近年木校那の彫刻を其仲向と名人と云ふれし  
吉徳大那那をの者なりと明弘世三年以て  
此の版をいふは文庫のの繪を定北帝の画あり  
見ゆべしめいなりと賞しけりしと云ふは  
の名をいふは内職をせしむる人あり  
しと云ふは大那那の所ありて女子好むから  
きと云ふは其の  
漢言集巻の著者なりと云ふは  
の著者なりと云ふは  
中の方按はの文ありと云ふは  
著者の心ありと云ふは

漢言集巻の  
著者なりと云  
ふは

近年木校那の  
名

近年木校那の彫刻を其仲向と名人と云ふれし  
吉徳大那那をの者なりと明弘世三年以て  
此の版をいふは文庫のの繪を定北帝の画あり  
見ゆべしめいなりと賞しけりしと云ふは  
の名をいふは内職をせしむる人あり  
しと云ふは大那那の所ありて女子好むから  
きと云ふは其の  
漢言集巻の著者なりと云ふは  
の著者なりと云ふは  
中の方按はの文ありと云ふは  
著者の心ありと云ふは

御日侍之寄進  
卯月吉日

九州筑前國  
長野  
寛永頃多東郡と稱せし見ゆ



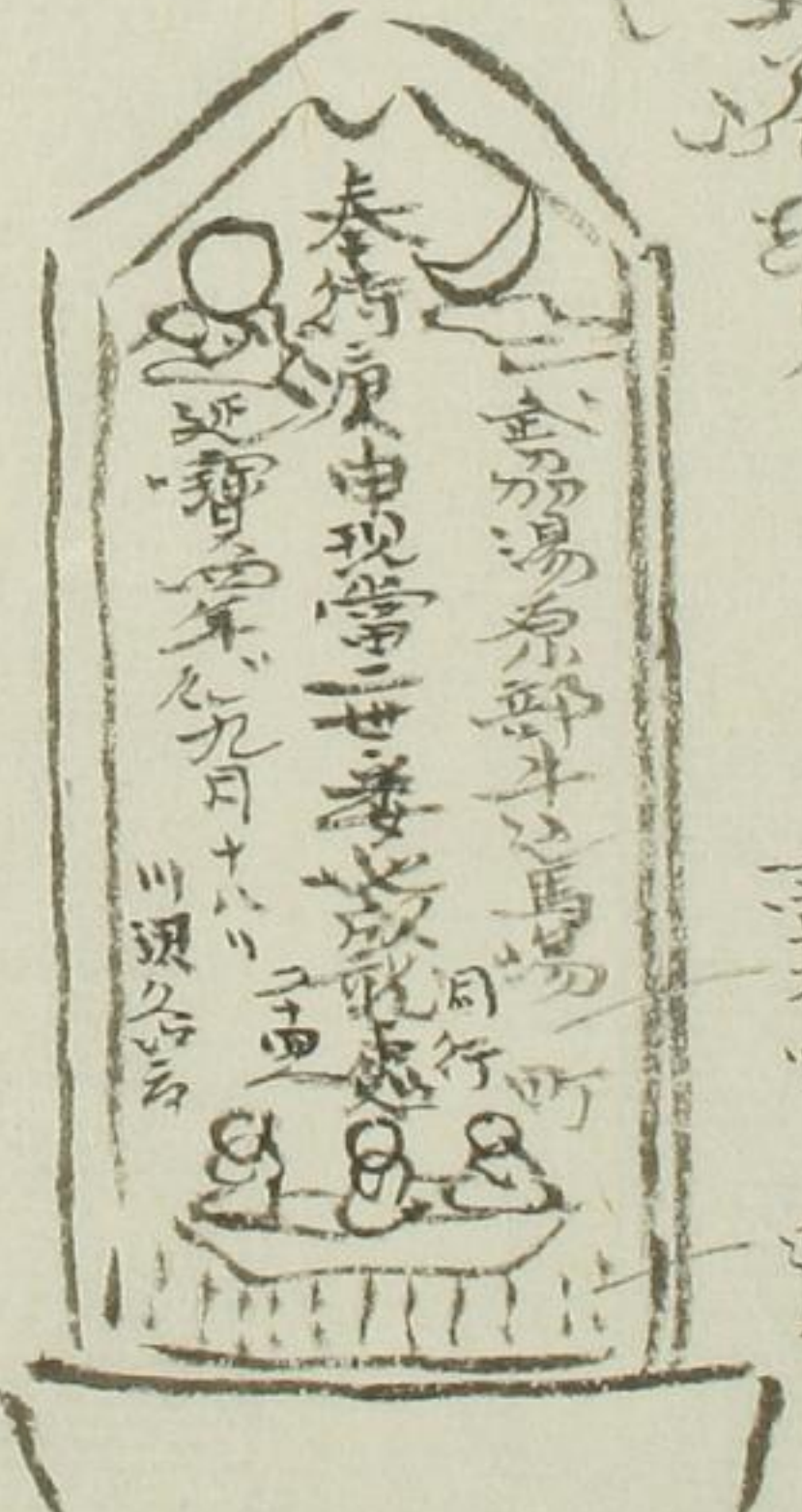
六十一年十九歳の  
石標

牛と下戸塚の清涼寺に  
下田の如き裏に  
刻しあり  
此子廿三歳の  
に所あり

八十一年拾九歳

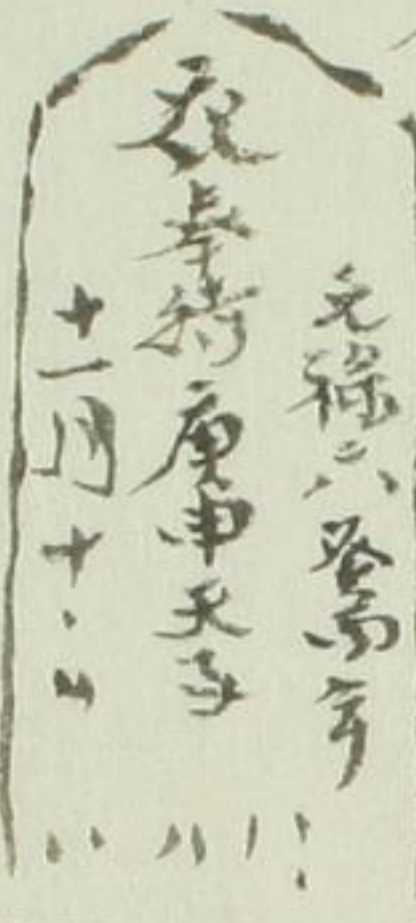
未迄考  
庚申

同未迄考  
此文中の  
魚カ



六八  
庚申

又六八幅の  
庚申天子と



蒲  
板  
研

定指の  
馬路  
又二  
ありと





列國がござたらうと云ふ事にしては、その事柄も手合せし、これこそ  
と云ふ事だに、それ先此のあなかりかたの、みした火火く所の  
角を交、結券千ある、其地代と云ふ事が、おもしろく、  
かり、結券がわたり、  
くちつて、地へ、前かき、  
結とちつて、火保年代にも、乃だ事は、火保年代の、  
みきつし、  
し、く、  
以、  
し、  
未、

木室堂

借衣服の  
名

此、  
其、  
の、  
用、  
天、  
の、  
の、  
借、  
一、

○三ッ牙 一反七ッ 及び半五と此の後市背絶せず  
○四ッ牙 一反三分二程 後巾ニテ寸匠ありんその細きのか  
きくはなるなり

蜘蛛の  
生

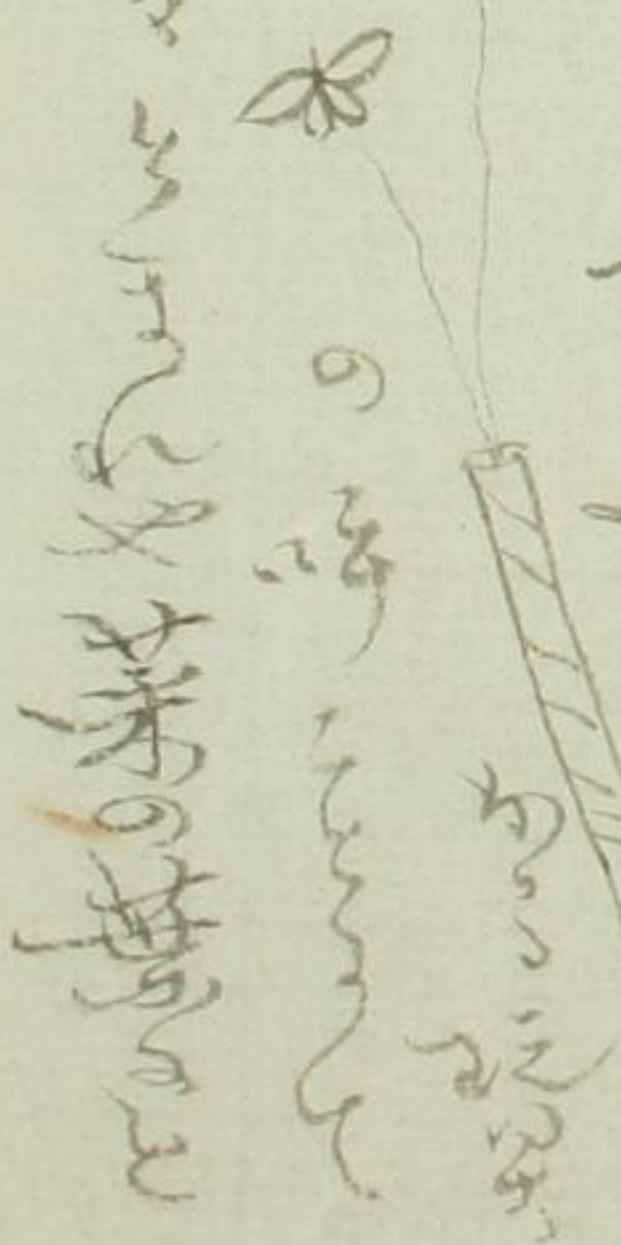
蜘蛛かごの花をせよとあるはあれこれと改むる事あり  
蜘蛛の鱗い免脱と云ふもむすむすの事あり  
あひひ花を牛も其心はなる事あり  
大久保より多志野に到る電車線路の常軌也とお世後なるあり  
そのこゝろに木標の立てありあり標を立てるは經文細き事あり  
大橋水記殿在難に記すは此處なる事あり  
二人の女と前記あり此處なる事あり  
しを今人家のあり地なり

高木  
會世美

高木  
の  
娘

栗の木杖を高木家の普請より取らるるの  
とて用ぬぬるの事あり  
佛よりこれと云ふ其堂の用材栗の木を用ひしよし  
え人足せよとありて通らぬと  
三ッ詞と蝶々菜の葉と云ふれあり  
改れと云ふことと云ふ事あり  
にちあることと云ふ事あり  
なることと云ふ事あり  
よの事あり  
と云ふ事あり  
あし

蝶々  
菜の  
葉











三方

三石のまみり角弁はまみり

ちがり

ちがりのあま

ちがり

ちがりのあま

ちがりのあま

ちがり

ちがりのあま

ちがりのあま

ちがり

ちがりのあま

四方赤

四方赤

四方赤

四方赤

四方赤

四方赤

四方赤

四方赤

四方赤

四方赤

ちがり

ちがりのあま

ちがりのあま

ちがり

ちがりのあま

ちがりのあま

ちがりのあま

ちがりのあま

ちがり

ちがりのあま

ちがりのあま

ちがりのあま

ちがりのあま

ちがり

ちがりのあま







せんがう

龍可如

ほんまうの毛乃たふちあひまを  
まよしの姚さ称

本まのちあひまをちまの三井  
明のあひま

千倉乃まのちあひまを  
浦戸千別

鹿乃のまのちあひまを  
西長

鹿乃のまのちあひまを  
西長

鹿乃のまのちあひまを  
西長

かんがう

兎屋 採寝

鹿乃のまのちあひまを  
西長

鹿乃のまのちあひまを  
西長

鹿乃のまのちあひまを  
西長

鹿乃のまのちあひまを  
西長

鹿乃のまのちあひまを  
西長

鹿乃のまのちあひまを  
西長





校

上海南京路  
南京路  
南京路

文

